

株式会社ダイフク

www.daifuku.co.jp



ダイフクは新たな“価値”の創造、提供を通じて 世界中の社会、産業、環境に貢献していきます

株式会社ダイフク 代表取締役社長

北條 正樹

キャスター/千葉大学客員教授

木場 弘子様

ニーズの変化に柔軟に対応し、 常に時代が求める“価値”を創造

木場 御社は1937年設立ということですが、現在のようなマテリアルハンドリング(マテハン) 業界のリーディングカンパニーとなるまで、どのような道を歩んでこられたのですか。

北條 当社は製鉄用の鍛圧機械の製造からスタートし、その後、港湾や倉庫での物品の積み込みや荷降ろしなどを行う荷役・運搬機械を手掛けてきました。1940年から50年代に開発した移動式搬送機や、輸入穀物の荷揚げを行うコンベヤは、作業の効率性はもちろん安全性を劇的に向上させるもので、当時としては画期的でした。

日本が高度成長期を迎える1950年代後半からは、自動車工場のチェンコンベヤシステムや無人搬送車へと業容を拡大。1960年代には建屋一体型の自動倉庫や、コンピュータオンライン制御のパレット自動倉庫など、いずれも日本初となる製品を多く世に送り出しました。

その後も、FA(ファクトリーオートメーション)、DA(ディストリビューションオートメーション)分野において、世界中の自動車工場や半導体・液晶パネルの生産に対応したグリーンルーム内での



1959年 日本初の乗用車専用工場へ納入したチェンコンベヤ



1982年 世界最先端のモータ工場にFAシステムを納入



2008年 世界初、クレーンのすれ違い走行を実現した高能力ケース自動倉庫

搬送・保管システム、インターネット通販における配送センターでの仕分け・ピッキングシステムなど、さまざまな業界に自動化設備を提供してきました。

木場 常に時代の先端に立ち、社会の変革に正面から取り組まれてきた中で、日本初、世界初の製品も多く生まれたのですね。

北條 改めて当社の軌跡を振り返ると、お客さまや社会のニーズの具現化にひたすらに取り組んできた77年だったと思います。その原動力となったのは、「お客さまやそこで働く人々、その先の消費者の皆さまに喜んでもらいたい」という思いでした。

産業や経済の発展に欠かせない インフラを支える使命感を胸に

木場 その思いは経営理念の「最適・最良のソリューションを提供し、世界に広がるお客さまと社会の発展に貢献する」という文言にも表れていますね。人と人のつながりを何より大切に取り組まれてきた御社の姿勢が伝わってきます。

北條 私たちにとって、設備の納入は「終わり」ではありません。物流や生産を止めないために、常に設備を保守・メンテナンスしリニューアルするという、お客さまと二人三脚になった長いお付き合いの、むしろ「始まり」です。長期にわたって稼働し、責任が生じるものだからこそ、「人と人のつながり」や「信頼」といったものが大切なのです。

木場 「止めない物流」のために、お客さまの現場に御社のサービススタッフが常駐したり、24時間365日体制の「システムサポートセンター」(※7ページ参照)もあるそうですね。

北條 自動車業界などでは、生産ラインが1分止まると1台の減産になると言われています。また半導体メーカーのように工場が24時間稼働しているところもあります。私たちはお客さまの一員という気持ちで、トラブルが生じた時にすぐに駆けつけられるよ



<プロフィール>

千葉大学教育学部を卒業後、1987年 TBSにアナウンサーとして入社。在局中は同局初の女性スポーツキャスターとして、「筑紫哲也ニュース23」など多数のスポーツ番組を担当。1992年からフリーランス。テレビ出演、コーディネーター、講演や執筆活動などのほか政府や省庁の審議会委員も歴任する。2013年、千葉大学客員教授に就任。



う、全国約60カ所にサービス拠点を設置しています。

木場 なるほど、経済活動や産業の発展に欠かせないインフラであるマテハンというものは、止めることのできないシステムなんですね。

開発力に一層磨きをかけるとともに、環境負荷低減の取り組みを推進

木場 今期はどのような経営方針のもと、事業活動を展開されているのですか。

北條 前期については計画を上回る増収増益を達成することができましたが、どれほど良い業績を挙げても、安全の意識やモラルの低い会社はいずれ破綻します。そこで今一度、原点に戻り、「S(Safety:安全)」「Q(Quality:品質)」「C(Cost:コスト)」「D(Development:開発)」そして「E(Ecology:環境)」をキーワードに、事業を進めていきます。

木場 通常、Dは「Delivery:納期」と定義されていると思うのですが、あえて「開発」としているのは、御社のモノづくりにかける意気込みということでしょうか。

北條 その通りです。グローバル市場において存在価値を高めるには、いかにニーズを先取りするかがカギになります。開発こそ、競争力の源泉であるとの認識に立ち、お客さまや社会が抱える課題にいち早く対応し、その解決に寄与する製品やサービスを開発することで、ダイフクブランドをさらに強固なものにしていきたいと考えています。

国内では、2012年に調剤監査支援システム「audit(オーディット)」(※15ページ参照)を市場に投入しましたが、これは当社の持つ画像処理および重量検品のノウハウを応用し、調剤薬局における投薬ミスを防ぐことができないか、という発想から生まれたものです。当社としては珍しいプロダクトアウト型の製品ですが、薬局様のニーズにマッチし、現在、350店舗で導入いただいています。今後は、課題を抱える業界に向けたソリューション提案にも、従来以上に積極的に取り組んでいきます。

また、環境配慮製品を「ダイフクエコプロダクツ」(※26ページ参照)という形で社内外に公表していますが、環境技術の開発・普及に全社を挙げて取り組むとともに、当社のマザー工場である滋賀事業所での環境負荷低減の取り組み(※21ページ参照)も推し進めていきます。

グループ総合力を高めるキーワードは「グローバル化とローカライゼーション」

木場 売上の約6割が海外ということでグローバル化を加速されています。事業をグローバルに展開するうえで、社長が重視

されていることは何ですか。

北條 ダイフクブランドを世界で通用するものに育成するには、それぞれの地域に合った機能・コスト・品質を提供していくことが必要不可欠です。そのためには、日本を頂点としたピラミッド型ではなく、各現地法人が主体的に判断し、行動できるようにすべきだと考え、経営トップを含む人材や生産体制の現地化を進めています。2014年時点で北米をはじめとする3つの現地法人では、外国人が社長を務めています。

一方で、「ブランドブック」を9言語で作成し、社はパネルを全世界の拠点に配布するなど、理念の共有化を図っています。また何よりも対話が重要と考え、毎年、現地法人のトップが一堂に会する海外現地法人会議を開催するなど、さまざまな機会を通じて活発な議論を行っています。

木場 9言語というのは驚きですね。やはり母国語で読むと、理解度が全然違いますから腑に落ちるでしょうね。理念を共有して一体感を高めつつ、地域に根ざした事業を展開。ここでもコミュニケーションを大切にすることが生かされていますね。

北條 そうです。「グローバル化とローカライゼーション」

を最重要テーマととらえ、今後も総合力を高めていくためにさまざまな交流を促進していきたいと考えています。

人と人とのつながりを大切に、社業を通じて社会に貢献していく

木場 事業の軌跡や概要について非常によくわかりました。改めて「ダイフクにとってのCSR」とはどのようなものか、お聞かせいただけますか。

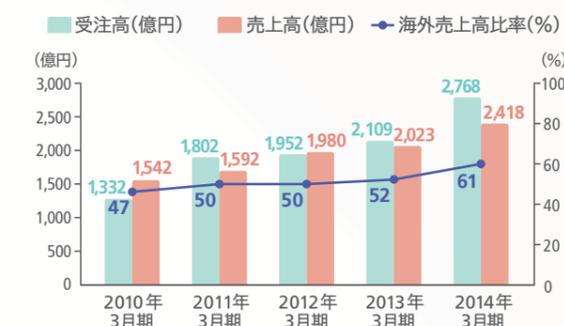
北條 企業が社会に貢献する方法はいろいろあると思います。しかし、企業の社会に対する「責任」という意味で言うと、社会全体のみならず、生活者一人一人にまで「ダイフクがあっただけよかった」と感じていただける“価値”を常に創造し、提供していくことではないでしょうか。

当社ではCSRを果たしていくために、「社業を通じて社会に貢献すること」と「人と人とのつながりを大切にすること」の2つを根幹に据えています。まずは社員同士のつながり、それからお客さま、お取引先さま、株主・投資家さま、地域の皆さまなど、あらゆる

会社概要

- ▶ **会社名** 株式会社ダイフク (Daifuku Co., Ltd.)
- ▶ **所在地** 大阪市西淀川区御幣島 3-2-11
- ▶ **設立** 1937年5月20日
- ▶ **資本金** 80億2,400万円 (2014年3月末現在)
- ▶ **代表者** 代表取締役社長 北條 正樹
- ▶ **従業員数** 7,349人 (グループ総数/2014年3月末現在)
- ▶ **売上高** 2,418億1,100万円 (2014年3月期)

■ 受注・売上高および海外売上高比率推移



■ ダイフクの主な製品群

- 保管システム 
- 搬送システム 
- 仕分けシステム 
- ピッキングシステム 
- クリーンルーム向けシステム 
- 自動車生産ライン向けシステム 
- 空港向けシステム 
- 洗車機 
- ボウリング設備、産業用コンピュータなど

ステークホルダーとのつながりを大切に、「人の心」を動かす価値ある製品やサービスを提供すること。それこそが、当社のCSRの真髄です。人の心が動けば、それはやがて世界を動かすことになると思っています。

木場 今回のCSRレポートでは「EDGE」という特集で、御社のさまざまな活動を紹介されていますね。

北條 「EDGE」は、当社のブランドメッセージ「Always an Edge Ahead」から生まれたものです。本レポートでは、まず「Engagement」として人とのつながりを第一に考え、「Development」として製品開発を通じて社会に貢献し、さらに「Global」として世界へとフィールドを広げ、「Environment」にもしっかりと配慮する当社の姿を表しています。



関わっているということがよく分かりました。ただ、御社の事業活動やCSRの取り組みをあまりご存じないという方も多いと思いますので、今後さらに生活者にも届く形で社会に向けて広く発信していただきたいですね。そうすると、私たちももっと意見を言いやすくなりますし、寄せられた意見の中からまた新たな製品・サービスを生み出し、それがまた私たちの生活をより良くしていくという、そんなスパイラルアップが実現するのではないかと思います。本日はありがとうございました。

北條 当社の製品、技術はマテハン・ロジスティクス総合展示場「日に新た館」(※11ページ参照)で広く公開しているのですが、CSRに関する考え方や活動についてもご理解いただき、忌憚のないご意見を頂戴できるよう、今後とも積極的な情報発信に努めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

お客さまから信頼される企業、社員が夢を持って働ける企業でありたい

木場 最後に、御社の目指す将来像と、ステークホルダーの皆さまへのメッセージをお願いします。

北條 世界中のお客さまから「ダイフクなら安心して任せられる」とどこよりも信頼される企業であること、そして社員が夢を持ってチャレンジし、その夢を実現できる企業であること。また、あらゆるステークホルダーとの共生関係を構築し、本当の意味での世界ナンバーワンの企業にしていけることが、私の夢です。「夢こそ前進の原動力」と信じ、社員と共に夢を持って新たな“価値”の創造に取り組んでいきます。

木場 今回お話を伺って、御社の事業が実は私たちの生活に深く

■ 社是

日彩
Hini Arata

今日の「われ」は
昨日の「われ」にあらず
明日の「われ」は
今日の「われ」にとどまるべからず

■ ブランドプロポジション

バリューイノベーション企業

私たちは、マテリアルハンドリングの総合メーカーとして培った実績と経験を活かし、お客さまに最適なソリューションを提供する「バリューイノベーション企業」へ進化します。

■ 経営理念

1. 最適・最良のソリューションを提供し、世界に広がるお客さまと社会の発展に貢献する。
2. 自由闊達な明るい企業風土のもと、健全で成長性豊かなグローバル経営に徹する。

■ ブランドメッセージ

Always an Edge Ahead

最適なソリューションを創造し提供することで、お客さまに「著しく優位な立場」をもたらしたいという思いと、発想力と行動力に秀でたプロフェッショナル集団として、たゆまぬ挑戦と変革を続ける私たちの姿勢を表しています。

Contents 目次

巻頭対談	1-5
特集EDGE	6-26
Engagement	7
Development	13
Global	17
Environment	21
CSRマネジメント	27-29
第三者意見	30

編集方針

ダイフクでは、当社が果たすべきCSR(企業の社会的責任)に関する考え方や活動をステークホルダーの皆さまにご理解いただくため、CSRレポートを発行しています。発行にあたっては、ステークホルダーとの良好なコミュニケーションを図るツールとして、オリジナリティを求め、手に取った方が興味と関心を持って読んでいただけるようなレポートづくりを目指しました。今後さらにCSR活動の質を高めるため、皆さまからのご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。

対象期間

2013年4月～2014年3月
※一部の掲載内容は対象期間外の情報も含まれます。

ご意見・お問い合わせ先

株式会社ダイフク
CSR本部 CSR推進室
〒105-0014 東京都港区芝2-14-5
TEL:03-3456-2243 FAX:03-3456-2258
E-mail:webmaster@ha.daifuku.co.jp



特集

Engagement
「人」の思いをつなげる

Development
技術で次代を拓く

Global
活躍フィールドは世界

Environment
環境への取り組み

私たちは「Always an Edge Ahead」をブランドメッセージとして掲げています。今回のCSRレポートでは、EDGEを頭文字に設定してダイフクのさまざまな活動をご紹介します。

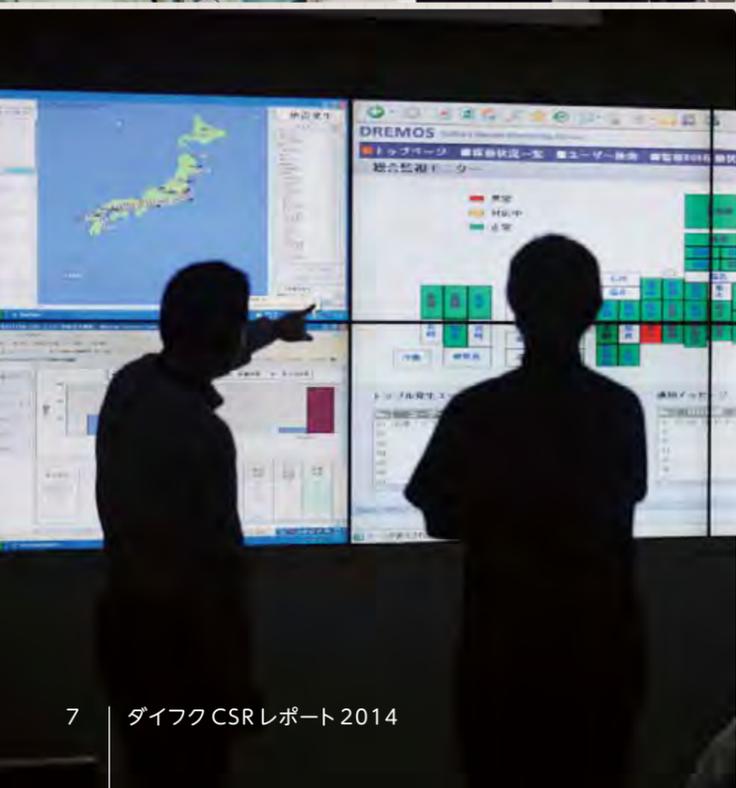
E Engagement

「人」の思いをつなげる

ダイフクは、あらゆる企業活動は「ステークホルダー」との共生関係の構築であると考え、常に「人とのつながり」を重視し、「人の思いをつなぐ」企業であり続けたいと考えています。

▶ 豊かな生活を支えるために
社会インフラを提供するベンダーの責務として
安定稼働や早期復旧を強力的にサポートしています

システムサポートセンター



専任技術者が24時間365日体制で対応

私たちダイフクの技術や製品は、生活に欠かせないさまざまな分野の生産・流通の現場で重要な役割を果たしています。このため納入設備に障害が生じた場合にはお客さまだけでなく、人々の暮らしにも多大な影響を及ぼしかねません。

そこで、ダイフクは万一の事態に迅速に対応するためシステムサポートセンター(SSC)を設置。全国約60カ所のサービス拠点と連携して、納入設備の安定稼働、障害の早期復旧に努めています。特にSSCは独自に構築したサポートシステムを利用して専任の技術者が、24時間365日体制でお客さまを支援しています。遠隔監視によるシステム障害のいち早い検知、お客さまからの問い合わせに対する適切な応答、各サービス拠点への的確な指示などが行えることが特長です。

業界に先駆けて開設。 よりきめ細やかで的確なサービスを提供

SSCは物流システム業界に先駆けたコールセンターとして1993年、小牧事業所に開設。2003年に滋賀事業所へ移転し、お客さまからいただいた電話の着信と同時に、社名、住所、納入設備、メンテナンス履歴などの情報をパソコンに表示させるCTI(Computer Telephony Integration)を導入、この情報を見ながら、お客さまとの対応にあたるようになりました。ただ近年の納入設備は高度なITシステムを利用しており、コンピュータメーカーやソフトウェアベンダーのエンジニアとの協力が求められるケースが増えてきたことから、2013年9月にサポートシステムをパートナー会社と情報共有できるように更新。これにより、パートナー会社との連携が強化されスピーディな対応を実現しています。また、対応の情報は、営業や設計部門、最寄りのサービス拠点とも共有できるシステムで、よりきめ細やかで的確なサービスを提供しています。

さらに、納入設備の長期的な安定稼働を目指すために、障害情報の蓄積・分析による障害の予見や未然防止を実現する新システムの構築に取り組んでおり、適切なメンテナンス提案につなげていきます。



担当者の声 FA&DA事業部門 サービス本部 総合サービスセンター長 三崎 謙治
技術に磨きをかけ、お客さまの満足度向上を目指します

設備納入後、お客さまとの接点を担うサービス技術者の質が、ダイフクの質そのものだと思います。このため、サービス技術者の育成の一環として、年間46講座を110回にわたって開催するなど

常に技術に磨きをかけ続けています。今後も「物流を止めない」ことを永遠の命題として、迅速な復旧にあたることはもとより、信頼性の高いサービスで、お客さまの満足度向上を目指していきます。

▶ 災害時の事業継続のために

地震による荷崩れを防ぐために、
さまざまな安全対策の研究開発を進めています

ラック振動実験チーム



荷崩れ防止に取り組む実験チーム始動

日本は地震大国であって、従来から自動倉庫などの保管システムの耐震化は大きな課題でした。地震による自動倉庫内の荷崩れは荷物の損傷やシステムの停止による物流の停滞につながり、産業や生活に大きな支障をきたします。荷崩れ防止は、お客さまの損害を最小限に抑えられるだけでなく、被災地への救援物資の供給や復旧の迅速化にも貢献できます。

ダイフクは、2008年4月に「ラック振動実験チーム」を立ち上げ、それに伴い、物流システム業界で初めて、疑似的な震動を起こす加振テーブルを導入しました。これまで外部機関に委託していた性能評価実験を自社で行えるようになり、開発スピードは大幅に早まりました。



揺れによる荷崩れの様子(上)。減崩ストッパーの装着や荷物にフィルムを巻くなど、さまざまな防止策で効果を確認

実験を経て、「減振ラック」「減崩ストッパー」が誕生

実験チームでは、お客さまに荷物をお借りし、加振実験により荷崩れのメカニズムを検証し、設備や荷物に合わせた積み方や荷崩れ防止用のフィルムの巻き方など、最適な安全対策を提案してきました。

同時に製品開発にも取り組み、2013年12月にはラックの柱と梁の接合部にダンパーを取り付けることで揺れを抑制し、荷物の落下を減少させる「減振ラック」を完成させました。さらに、荷物の揺れをソフトに吸収し、上部の荷物のずれを抑える「減崩ストッパー」も開発。お客さまへの提案の幅を広げています。

今後も、ダイフクは荷崩れ防止にさまざまな角度から取り組み、「地震に負けない」物流システムを提供し、産業界・社会の発展に貢献していきます。

担当者の声 FA&DA事業部門 生産本部 構造設計部 企画・開発課長 長谷川 豊

地震対策向けシステムのさらなるラインアップ拡充に努めていきます

お客さまの保管設備が地震によってどのような影響を受けるか、評価実験を繰り返し、最適な改善提案につなげてきました。蓄積されたノウハウの中から当社独自の製品も生まれ、提案の幅も広が

ってきています。これからも、ラインアップの拡充に努め、お客さまに最適な地震対策向けシステムを提供できるソリューションパートナーを目指していきます。



▶ 作業・現場の安全のために

ヒヤリハットを実際に体感することで、事故災害ゼロを目指します

安全体感道場



墜落体感



火気体感

パートナー企業や地域の企業・住民にも開放

絶対的な安全を目指し、事故を予防するために、あえて危険を体験する。本社(大阪)にある「安全体感道場」は、設備などの据付工事を行う際の危険作業を疑似体験できる施設です。当社の工事・サービス系社員や入社1年目の社員に加え、安全への意識を高めていただくために、パートナー企業や外部からの受講も受け入れています。「墜落」「感電」「挟まれ」「転倒」「火気」「クリーン」の6つのテーマで構成し、2010年6月の開設以来、延べ1,732名(2014年3月末現在)が受講しています。

また、2014年4月、滋賀事業所に製造系社員向けの安全体感道場を開設しました。

パートナー企業の声 株式会社沼沢工業(本社・三重県津市) 代表取締役 安江 利光 様

危険な状況を視覚化することで、リスク対応力が高まりました

道場での疑似体験のおかげで、危険の具体的な状況を頭の中で視覚化できるようになりました。業務上起こりうる事故への「リスク感性」が発達し



たと実感しています。この経験を社内トレーニングにも活用し、ダイフクさんと共に、より安全な現場を実現していきたいと考えています。

▶ 地域貢献のために

地域社会の一員として、名所の環境や美観を守ります

しゃくなげ溪清掃



「ほんしゃくなげ群落」の清掃活動に参加

滋賀事業所のほど近くに、国の天然記念物に指定されている「ほんしゃくなげ群落(しゃくなげ溪)」があります。当社は2005年度から毎年、日野観光協会主催の一斉清掃活動に参加しており、地元観光資源の維持に貢献しています。

主催者の声 日野観光協会(滋賀県日野町) 事務局長 藤澤 一浩 様

安全・快適に自然を堪能できます

今回も大勢の皆さまにご協力いただきありがとうございました。渓谷内の遊歩道は1年の間で落葉などが降り積もり、景観の悪化や散策の妨げ



になります。清掃は開花前の4月の恒例行事です。歩道も長いことから、皆さまの参加で多い助けかっています。

▶開かれたダイフクであるために

おもてなしの心で
ステークホルダーの皆さまをお迎えます

日に新たな館

来館者数は延べ35万名を突破

マテハン・ロジスティクス総合展示場「日に新たな館」が、オープンしたのは20年前の1994年6月。ダイフクの製品をまず見て、当社事業への理解を深めていただきたいとの思いで設立に至りました。最新のシステム・ソリューションを体感できる世界最大級の展示場で、マテハンシステム・機器をはじめ

ロジスティクス関連企業の製品、150種類・400点を備えています。来館者数も2013年9月に延べ35万名を超えました。

館内ではすべてのお客さまに専任スタッフによる引率案内を行い、ロジスティクスをより分かりやすく、おもてなしの心を持ってお迎えています。

メガソーラーの見学も加え、一層幅広く

来館者は、導入を検討されているお客さまはもちろん、物流に関わる業界団体、海外からの視察団など、多岐にわたります。また、株主さまや社員の家族、地域の住民を対象と

した各種見学会なども実施しています。さらに、2014年度からは、近隣の小・中学生向けに環境教育の一環として、ダイフク滋賀メガソーラーと合わせた見学会も開始しました。



担当者の声 株式会社日に新たな館 館長 森本 薫

20周年を迎え、新たな挑戦をスタートします

多くの方から、「操作体験で製品の使い勝手が体感できた」「スタッフの解説が分かりやすく、マテハン機器の仕組み・特長がよく理解できた」などの評価をいただいています。20周年を迎えた2014年を

感謝と飛躍の年として、新たな展示企画においても「日新」を実践していくとともに、次の20年を見据え、皆さまに喜んでいただける施設づくりを目指していきます。

トピックス

お客さまとともに
「自動認識システム大賞」特別賞を受賞



当社が冷凍自動倉庫を納入した盛信冷凍庫株式会社様の「RFIDを使った日本初の魚用冷凍倉庫システム」が、第15回自動認識システム大賞の特別賞を受賞しました。同社が東日本大震災で津波被害を受けた本社加工場を再構築したものです。

社員とともに
社内SNSで社員コミュニケーションを活性化



社員間の活発なコミュニケーションを目指して、社内SNSを開始しました。組織を超えた人脈の形成や情報交換など、業務効率の向上を図っています。この一環として、当社の環境活動やブランドに関するコミュニティサイトを立ち上げ、情報共有や社員間の交流に活用しています。

株主・投資家さまのために
株主さま向け日に新たな館見学会を開催



2013年10月11日、6回目となる「株主さま 日に新たな館見学会」を開催しました。館内のマテハンシステム・機器を見学いただいたほか、「ダイフク滋賀メガソーラー」を高台の見学ステージからご覧いただきました。

株主・投資家さまのために
東証IRフェスタ2014に出展



2014年2月21日、22日に東京国際フォーラムで開催された「東証IRフェスタ2014」に出展。中期経営計画の順調な進捗をご説明し、個人投資家と活発なコミュニケーションを図る場となりました。

お取引先さまとともに
経営・生産動向説明会を開催



2014年5月29日、メーカー・商社から加工・工事・サービス・設計・ソフト開発関係まで、計152社のお取引先さまを招待し、2014年度の「経営・生産動向説明会」を開催。当社の経営・生産の現状と将来動向について情報を共有しました。

お取引先さまとともに
優良サプライヤー7社を表彰



当社は「サプライヤー評価システム」を構築し、毎年、優良サプライヤーを表彰する「S.Q.D.賞」を設けています。今回は、個別表彰のほか、部門推薦を加え、294社の中から7社を選出しました。

〔個別表彰〕
有限会社浦和エンジニアリングサービス様、東海理研株式会社様、株式会社沼沢工業様

〔部門推薦〕
株式会社鶴岡様、名古屋樹脂工業株式会社様、株式会社協同精工様、シマト工業株式会社様

豊かな社会、便利なくらしを支えるため、ダイフクは常にお客さまの最良のパートナーとなり、より新しいシステム・製品の開発に力を注いでいます。

効率的で正確な集品作業を実現し、
高まる個配サービスへの需要に応えます

デジタルピッキングシステム eye-navi®

日本マテリアル・ハンドリング協会
第24回日本MH大賞受賞



eye-navi表示器本体

生協・個配サービス向けに開発。高い生産性は幅広い業種で生きる

通販の先駆けともいえる生活協同組合(生協)が、共同購入事業をスタートさせたのは1960年代後半。その後も進展するライフスタイルの多様化や食の安全意識の高まりを受け、配送サービスはグループ単位の共同購入から、家庭ごとに玄関まで届ける個別配送(個配)へとシフト。さらに需要増加が見込めるため物流センターでは、より短時間でミスなく商品を集め出荷できるピッキング生産性の高いシステムが要求され

てきました。

こうしたニーズを背景に開発したのが新技術・デバイスを盛り込んだデジタルピッキングシステム(DPS)「eye-navi(アイナビ)」です。



FA&DA事業部門 生産本部
設計部 開発グループ
係長 岩田 昌重

集品作業の生産性を飛躍的に向上

DPSによる集品は、複数の作業者がラインを構成し、それぞれ担当する商品棚の前に立ち、順次、表示器の指示に従ってコンベヤ上を流れる集品箱に商品を投入していくものです。商品棚には取り出す商品の位置と数量を示す表示器、取り出した商品を投入する集品箱を搬送するコンベヤには、該当の集品箱と投入数を指示する表示器が固定して取り付けられていました。このため、集品箱と表示器のズレによりピッキングミスが起こっていました。また、1つのラインで作業を行っていくため、作業者の1人が商品取り出しなどに時間がかかるとライン(コンベヤ)全体が停止してしまい、他の人が作業待ちの状態になっていました。あるお客さまでは、この作業待ちが集品作業の60%にも達する例もありました。

ではなく、作業者の担当ゾーンごとに制御する方式や、作業方式にフロントピック方式を(図)採用。こうした工夫や改良により集品人時生産性(※)は従来システムと比べて1.5倍と飛躍的に向上しました。



図：フロントピック方式
従来、作業者は集品箱と商品棚の間にいたため、振り返って作業をしていたが(左)、商品棚の前に集品箱を配置することで(右)、作業者の負担を軽減した。

これらの課題を解決するためeye-naviは、集品箱と表示器を一体化した搬送に加え、コンベヤの稼働を全体で制御するの

さまざまなソリューションで物流効率化を支える

eye-naviは少品種・高頻度の集品に適したピッキングシステムです。一方、多品種で出荷頻度の低い、多数の商品を対象にした集品用のシステムとして「ジャングルカート」を開発。2011年に稼働した、みやぎ生協様の「成田セットセンター」(宮城県富谷町)に初導入され、高い評価をいただきました。

不足が物流現場の大きな課題となってくる中、さまざまな状況に応じた課題解決を提供できることが求められます。ダイフクはお客さまそれぞれの最適・最良を目指し、ソリューションを豊富に取り揃え、物流効率化を支援していきます。



ジャングルカート

ピッキングシステムは、個配分野だけでなく通販やネットスーパーなど、ますます多様化する購買形態を背景に、常に進化させていかなければなりません。また、少子高齢化により労働力

※集品人時生産性：1時間当たりの作業者の集品処理点数



お客さまの声 みやぎ生活協同組合 成田セットセンター センター長 小野寺 淳様

組合員さまへのサービスレベル向上につながっています

eye-naviやジャングルカートを導入して、集品の生産性を大幅に高めるとともに、取扱品種の増大にも柔軟に対応できるようになりました。商品のラインアップが増したことで組合員さまの選択肢を

増やすことができ、サービスレベルの向上にもつながっています。安心・安全な食品をスピーディにお届けし、生協・個配のセット業務の効率化を実現しました。

薬局の投薬ミス防止し薬剤師と患者に安全・安心を提供しています

調剤監査支援システム audit®

ダイフクの技術で投薬ミスを防ぐ

処方せんに基づき薬を渡す調剤薬局では、ミスはあってはならないことです。しかし現実にはミスは発生し、なかには命にかかわる深刻な事態も起きています。そこでダイフクは“機械の目”による調剤監査を行うことで、ヒューマンエラーを未然に防ぐことをコンセプトに「audit(オーディット)」を開発しました。

調剤監査は、調剤(薬のピッキング)した後、処方せんと調剤に誤りがないかを検品する作業です。処方せんに対してミスを起こさないということでは、調剤を間違いなく行うことが基本ですが、人手による作業のため、監査は欠かすことのできない

工程になります。ただ、監査を行うのも薬剤師となるため、その正確性や作業負荷の軽減は、調剤薬局にとって大きな課題でした。auditは、薬の画像のパターンマッチングと重量検品により正しく調剤されたかを判定します。この技術は物流システムで培われたノウハウから生まれたものです。



FA&DA事業部門 営業本部
メディカルソリューショングループ長
谷口 央

薬剤師のストレスも軽減。患者へのサービスもより向上

2012年に市場投入したauditは、2014年3月末時点で全国350カ所の薬局で活用されています。auditの導入により、薬剤師の「正しく投薬できたか」というストレスは軽減され、患者さまへの服薬指導など、本来の医療サービスの質向上にもつながっています。また、監査記録を保存する機能もあるため、「薬をもらっていない」などのトラブル防止

にも役立っています。今後、さらなる使いやすさの向上に取り組み、医療現場の安全・安心を支えていきます。



お客様の声 しろくま薬局(大阪府貝塚市) 社長 児玉 真也 様

一人薬剤師でも、お薬の渡し忘れの不安が解消できました

実質的に一人で調剤を行う割合が多く、過誤発生のリスクが高く不安を抱えていました。人なら見逃す可能性のあるものもauditなら正確に監査でき、また処方した薬のデータが履歴として残るので後から確認もでき、患者さまに正しい薬を処方したかの心配や不安もなくなりました。今では心強いパートナーとして欠かせない存在となっています。

トピックス

魚の鮮度を保つために「自動凍結庫」



サイズ別にダンボール梱包された魚を、凍結庫に自動で格納し、鮮度を保つために-35℃まで急速冷凍する自動倉庫システムです。世界で初めて魚の急速冷凍に自動倉庫を活用して、無人化を実現しました。

クリーン・セーフティ・メンテナンスフリー「ワイヤレス給電ソリューション」



非接触給電「HID」の技術を活用したワイヤレス給電システムを構築。フォークリフトや無人搬送車などのバッテリー充電、搬送装置の移動中給電をケーブルレスにするなど、自動車、半導体・液晶、医薬品業界など幅広い分野で採用されています。

搬送高さ自由自在「FALS(Flexible Assembly Leveling System)」



自動車生産の組立ラインにおいて、作業者が作業しやすい高さに車体を昇降させることができ、作業者は伸びたり屈んだりする必要がなくなり、体への負担を大幅に軽減。加えて、エンジンや大物部品などの組み付け精度の向上にも効果を上げています。

業界最速、洗浄・乾燥性能が向上「門型洗車機ユーロス」



フルサービスSS向けの門型洗車機。高性能センサー搭載の垂直昇降式トップブラシの採用やリヤ部の乾燥力を高めたことにより、洗浄・乾燥性能を向上させました。また、洗車時間も85秒/台と業界最速、レール長も業界最短の7.8mを実現しスペース効率を向上させました。

世界初、国際安全規格を取得「エリア管理システム」



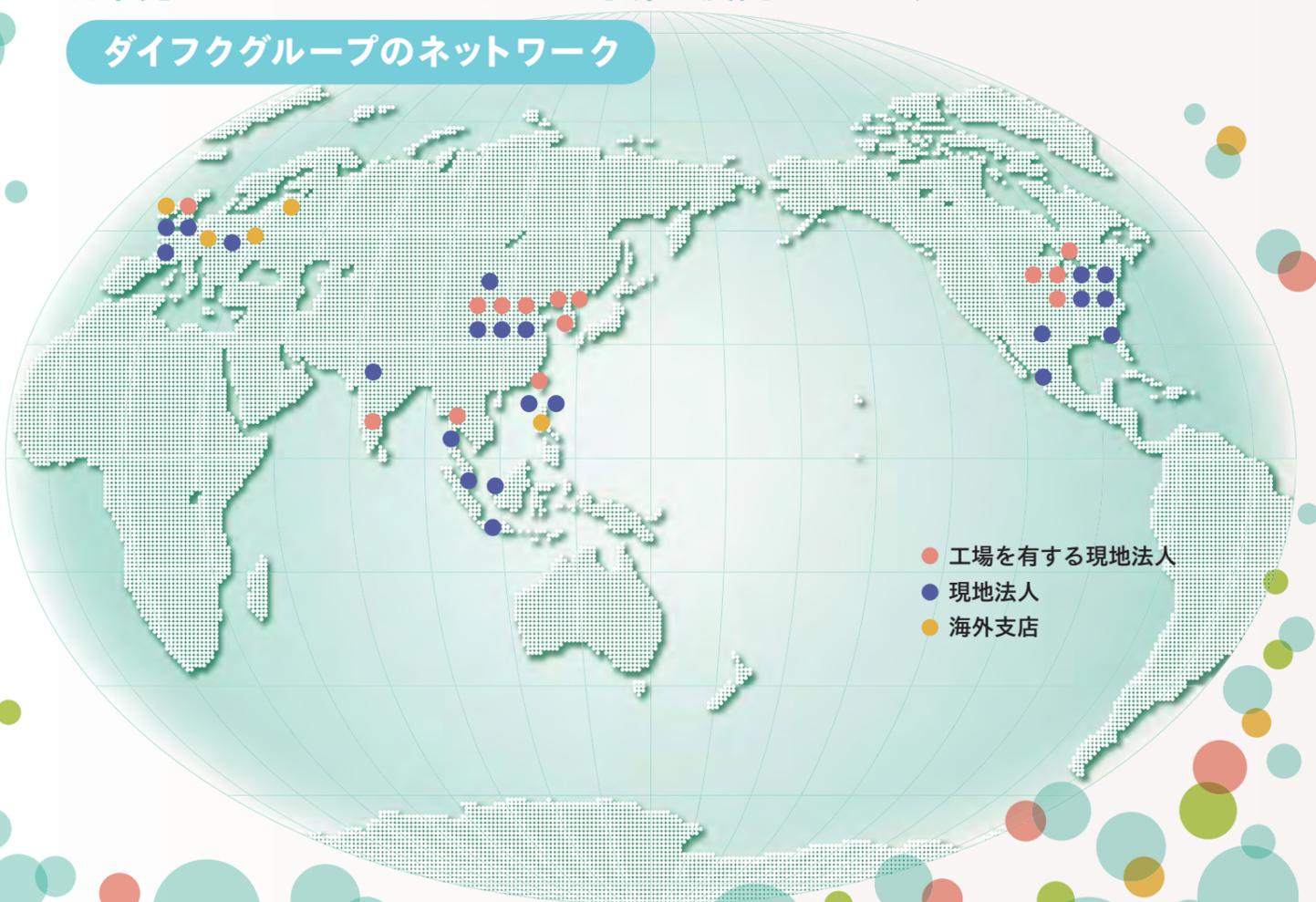
経済産業省と新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)による「生活支援ロボット実用化プロジェクト」の一環として、「エリア管理システム」を開発。2014年2月、生活支援ロボットの国際安全規格「ISO 13482」の認証を世界で初めて取得しました。同システムは、従来に比べ約3倍の200m/分で走行する高速ビークル(写真右)の安全性を高めるために開発したものです。UWB(Ultra Wide Band:超広帯域無線)による位置計測で、配送センター内の作業員やフォークリフトの位置をリアルタイムに計測し、ビークルの走行速度をコントロールすることで安全を確保します。



グローバルな事業展開で培った豊富な技術と知識を生かし、お客さまに常に最適・最良のソリューションを提供することを通じ、世界のすべての人に新たな価値をお届けしていきます。

世界20の国と地域に拠点を置き、
日本発のグローバルブランドとして事業を展開しています

ダイフクグループのネットワーク



ダイフクグループのシナジー効果を生かし、
北米事業をけん引していきます

Daifuku Webb Holding Company (DWHC) は米国のグループ会社のビジネス・ノウハウ、製品、経営資源を共有化し、さらなる成長と顧客サービスの充実を目指し、2011年に北米の統括会社として設立されました。Daifuku America Corporation, Jervis B. Webb Company, Logan Teleflex, Inc., Elite Line Services, LLCを事業会社として活動してきましたが2013年10月、

さらに革新的なマテハンメーカーとしての位置付けを強固にするため、Wynright Corporationをグループに加えました。DWHCはグループの枠組みの拡大や構造改革により、競合他社を凌駕する経営基盤の構築を目指しています。ダイフクグループにおいて、まだまだ成長が期待できる北米事業をけん引していきます。



Brian G. Stewart
President and CEO
Daifuku Webb Holding Company

USA

お客さま **SKECHERS USA Inc.**
(以下、スケッチャーズ)

将来の物量増加に拡張性を持たせた最新鋭のマテハンシステムを納入

ダイフク担当者の声



Bob Liebe
Divisional President, Solutions
Wynright Corporation

プロジェクトの立ち上がりから参画し、敷地の選定をはじめマテハン設備や建屋の設計も当社で担当しました。受注後、計画が2年延期されたため、人員確保など苦労もありましたが、社内外からスタッフを集めチーム一丸となって工期6カ月の日程どおりに納入することができました。これによりお客さまから高い評価をいただき、自分自身も満足しています。今後も、お客さまから信頼されるパートナーであり続けるため、サポート力の強化や人材育成に注力していきます。さらにグループ間の連携を強化し事業拡大に貢献したいと考えています。

シューズのデザイン・製造・販売を手掛けるスケッチャーズ様は2011年、全米への配送を一手に担う巨大配送センターを稼働。将来的に物量の増加に対応できるよう拡張性を持ったマテハンシステムを導入しています。ダイフクグループの一員であるWynright社がエンジニアリングを手掛けました。



USA

お客さま **Macy's, Inc.**
(以下、メイシーズ)

無人搬送車により、搬送作業の大幅な省人化と効率化を実現

ダイフク担当者の声



Bruce Buscher
Vice President, Sales
Smart Handling Group
Jervis B. Webb Company

メイシーズ様は倉庫内に初めて無人搬送車「SmartCart」を採用したことから、同機の運用方法や出荷スケジュールを中断させずにシステム納入することなど、さまざまな取り組みが求められました。苦労はありましたが、無事にプロジェクトを完遂。SmartCartは機能性に優れ安全性も高く、故障もないと大変気に入っていただけています。効率化を常に考えるお客さまにとってSmartCartの利点がうまくマッチングしたのだと思います。SmartCartはここ数年、販売も好調で今後も成長が見込めるため、引き続き拡販に努めていきます。

米国最大手の百貨店メイシーズ様は2009年、家具専用の物流センターにSmartCartを5台導入。さまざまな荷姿・サイズの商品を効率よく搬送できるだけでなく、大幅な省人化も実現しました。北米で無人搬送車の実績を多数持つ、ダイフクグループ会社のWebb社がシステム構築を行いました。



INDIA

お客さま Mahindra & Mahindra Ltd.
(以下、M&M)

塗装後のボディの一時保管ならびに順列出庫装置に自動倉庫を活用

ダイフク担当者の声



Asim Behera
Sales manager, India

納期が遅れることが多いインドにあつて、スケジュール通りに工事が進行。当初の予定より早く完成しダイフクのプロジェクト体制にお客さまが感激されました。自動倉庫の評価も大変良く、お客さまはこのシステムの導入が大成功だったと満足されています。インド市場では、新規案件が多岐にわたっており、各種システムを立ち上げることにやりがいを感じています。これまで培ってきたエンジニアリングやマテハンの知識と経験を生かして、インド市場でのダイフクの知名度アップに努めていきます。

インドを代表する自動車メーカーM&M様は2013年、生産拠点の一つであるナシク工場に自動倉庫を活用した塗装ボディパッファシステムを導入。組立ラインとのシフト差を調整するとともに、従来最長で30分かかっていた出庫指示から組立ラインへの投入までの時間をわずか2分へと大幅に短縮しました。



SINGAPORE

お客さま PT Indomaguro Tunas Unggul
(以下、インドマグロ)

省人化と品温管理を徹底したインドネシア初となる冷凍自動倉庫を構築

ダイフク担当者の声



David Tio
Manager, Sales and Design Engineering
Daifuku Mechatronics (Singapore) Pte. Ltd.

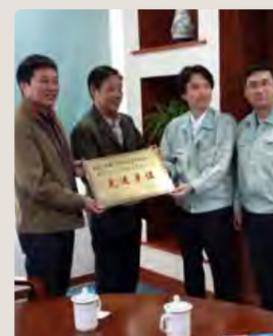
ダイフクシンガポールの一員として、インドネシア初となる冷凍自動倉庫のプロジェクトに関われて名誉に思います。競合他社との価格競争が激しい中、独自性のある自動化システムと、実績、品質、経験を評価していただきました。コンサルティングから設計、施行・稼働、サポートまで、シンガポール、インドネシア、日本3カ国のメンバーで行い、全員で成功に導くことができました。このような海外プロジェクトでは技術的な面はもちろん、人と人とのつながりやお客さまとの対話を通してサポートすることこそ、私たちの“edge”(競争優位)だと考えています。

インドネシア最大の水産加工会社インドマグロ様は2011年、ジャカルタ工場に同国初となる冷凍自動倉庫を導入。マグロや甘えびなどの海産物のほか、大手ファストフードのフライドポテトなどを格納しています。規模は、スタックークレーン6基、格納数1万4,144パレット。在庫管理コンピュータで集中管理しています。



トピックス

中国・常熟市から高評価 「安全生産優良企業賞」を受賞



2014年2月21日、大福(中国)自動化設備有限公司は常熟市安全生産監督管理局より「2013年度安全生産優良企業賞」を受賞しました。毎朝の安全宣言、週一回の危険予知活動のほか、安全委員会によるパトロールなど安全活動の取り組みが評価されました。

台湾の産業技術発展に一役 半導体・液晶向けシステムの製造工場を紹介



台湾經濟部の下部組織が主催する「先進工場見学会」に台湾大福高科技設備股份有限公司が選ばれ2014年5月30日、現地企業をはじめとする22社のメンバーが台南工場を訪れました。同会は台湾の産業技術発展のために活動しており、同会事務局長の推薦により実現しました。

子ども達の科学技術教育に貢献 Webb社が「FIRST LEGO League」を主催



2013年11月9日、当社グループのJervis B. Webb Companyは米国・ミシガン州の展示場で「FIRST LEGO League」の試合を主催。FIRSTは、子ども達を将来の科学技術分野のリーダーに育てるために、科学・テクノロジー・工学・数学の能力を伸ばす教育プログラムを企画するものです。

3次元技術のロボットを開発 Wynright社が「Game Changer Award」を受賞



2013年10月、当社グループのWynright Corporationの荷降ろし用ロボットがRobotics Business Review誌から「Game Changer Award」を受賞。自動誘導式のロボットは3次元技術により、積み重ねた荷物の大きさにかかわらず荷降ろしができ省力化に貢献します。

世界の展示会に出展 当社グループの技術力・開発力などをPR

世界各国のさまざまな業界向けの展示会に出展し、世界中の皆さまに当社の技術力、開発力、グローバル対応力をPRしています。



インド・デリー
India Warehousing Show 2013



タイ・バンコク
The 10th Thailand International Logistics Fair 2013



中国・上海
CeMAT ASIA 2013



米国・アトランタ
MODEX 2014

環境分野で活躍する皆さまを
ご案内しました

滋賀事業所エコツアー

ダイフクは、事業活動のあらゆる局面で環境負荷の低減に努めるとともに、自然環境や多様な生物と共存するモノづくりを目指しています。
また、エコプロダクツなどの製品を通じて、低炭素社会の実現に貢献していきます。

2013年11月に稼働したダイフク滋賀メガソーラー

■設置面積 : 5.2万㎡ ■発電容量 : 4,438kW
■パネル枚数: 1万7,752枚 ■年間発電量: 430万kWh



滋賀県立大学 環境科学部
環境政策・計画学科
准教授 高橋卓也 様

滋賀県立大学 環境科学部 環境政策・計画学科
環境マネジメント事務所
吉原 太一さん 石森 結衣さん 村瀬 文映さん

滋賀県立琵琶湖博物館
研究部生態系研究領域
博士 亀田佳代子 様
鳥類を中心に、生態系機能、生態系管理
をテーマに研究。滋賀大学非常勤講師、
滋賀県立大学非常勤講師などを歴任。

人、社会、環境に貢献する製品は それらを大切にする生産現場から生まれる

当日は実際にさまざまな施設を見ていただきながら、廃棄物削減、環境保全、自然エネルギー活用に向けた取り組みなどについてご説明しました。

廃棄物は、各棟で分別してから廃棄物ステーションに集積。銅や廃プラスチックなどリサイクルできるものはリサイクル業者に売却し、それ以外は適切に処分しています。その一連の流れを見ていただくとともに、正確に分別できるよう写真パネルを掲出していることや、部門ごとの排出量を把握し、その処理費用を部門で負担することで、削減の意識を高めていることなどを説明。また、生産現場での梱包材削減を目的とした通い箱の使用に加え、製品を段積みにして出荷時の積載効率を向上させる輸送環境負荷低減の取り組み、さらにはてんぷら油のバイオディーゼル化によるリサイクルの取り組みなどについても紹介しました。

環境保全については、3カ所ある排水処理場や防油フェンスなどを見ていただきました。排水処理においては、「絶対に環境汚染物質を外に出さない」との強い思いで、滋賀県の水質基準より10倍も厳しい基準を設けています。

自然エネルギーの活用については、メガソーラー(大規模太陽光発電システム)のほか、ソーラー発電式の外灯を導入しています。



廃棄物の分別を写真入りで示した掲示版



排水処理場



出荷する製品の段積み

120万㎡の広大な敷地を持つ 緑豊かなインダストリアルパーク

当社は、1970年に「インダストリアルパーク構想」のもと、120万㎡にも及ぶ広大な用地を取得。工場建設に着手するとともに、人工池や遊歩道の配置など緑地整備を進めてきました。現在では、11の工場が建ち並ぶ世界最大級のマテハンシステム・機器の生産拠点となっています。

さらに2013年11月には、5.2万㎡に及ぶメガソーラーを新設。ここから生まれるクリーンな電力は、電力会社を通じて企業や一般家庭に供給されています。



敷地の3割以上が緑地



草地やため池などさまざまな環境が広がる

豊かな自然を生かし 健康増進イベントも実施

施設見学に続いて向かったのは、「やすらぎ乃池」沿いの遊歩道「やすらぎロード」。緑の中に小道が続き、途中、水辺に下りられるところもあります。一行も終始リラックスモードで、散策を楽しみました。

「やすらぎロード」の1周は720m、昼休みには、食後の運動と社員の歩く姿も多く見られます。また、健康増進を目的とした「ウォーキングイベント」を開催。2013年度は、5月と9月の2回で延べ237名が参加し、ウォーキングだけでなく、竹馬や竹ぼっくり、縄とびなども行いました。

滋賀事業所には、もう1つ「しゃくなげ乃池」と呼ばれる人工池があります。当日はちょうど、しゃくなげが皆さまを迎えるように大きなピンク色の花を咲かせていました。現在は松林に囲まれ、足を



踏み入れる人もあまりいない状態ですが、今後は、手つかずの自然を生かしながら、気軽に自然と触れ合える場として、遊歩道を整備していく予定です。学生の皆さまからは「下草刈りに近隣の小学生などの参加を募ってはどうか」などのアイデアもいただきました。



地元日野町のシンボル「しゃくなげ」



池周辺のアカマツ林を抜けて



貴重な動植物のすみか

多種多様な生物とモノづくりの共存を目指して

多様な生物が生息していることも当事業所の大きな魅力です。「生物多様性の保全には、まず実態を正確に把握することが必要不可欠」と、2013年度に専門機関へ依頼。1年にわたる生態調査を実施した結果、多くの在来種が生息していることが分かりました。その中には、「ハヤブサ」「カスミサンショウウオ」「キンラン」「オグマサナエ」など、多くの絶滅危惧種が含まれており、絶滅の危機に瀕している野生生物のリスト「レッドリスト」に掲載されているものだけで49種にも及びました。今後、当社では定点観測などを通じて、生物多様性の保全が図られているかをチェックするとともに、専門知識を有する団体などとの協働についても検討していく予定です。

私たちは、これからも多様な生物や豊かな自然環境との共存を目指していきます。



ハヤブサ 生態系の頂点に位置する猛禽類(もつさんるい)。鋭い爪とくちばしを持ち、他の動物を捕食する習性のある鳥類の総称

カスミサンショウウオ 2~3月に湿地や水路で産卵する全長10cm程度の小型のサンショウウオ

キンラン 4~6月に黄色い花を咲かせるラン科の多年生植物

オグマサナエ 平野から丘陵地にかけての古い池沼に生息するトンボの一種

ツアーを終えて

滋賀事業所長を交えた意見交換会を開催しました。

地域との協働や発信力の強化を

まずは足下の環境保全から取り組んでいこうという姿勢が強く感じられました。今後は、さらに地域との協働や発信力の強化にも取り組んでほしいと思います。また、こうしたエコ思想を取り入れた製品が滋賀事業所から多く生まれることを期待しています。



共存を推進するためにはゾーニングが効果的

広大な敷地の割に、排出される廃棄物量が少なく、驚きました。これからは、「建物近辺の公園」「自然を生かした里山」「あまり手を入れずに自然のまま残す場所」のように、環境と棲息する生物に合わせて段階的にゾーニングをするとうまいのではないのでしょうか。



学生の皆さまからもご意見をいただきました

- ▶ 建物と自然の景観の美しさに感動した。
- ▶ 写真付きの廃棄物分別表を掲出し、なおかつ該当しない場合は、廃棄物の写真を撮って担当者に問い合わせ、その情報がデータベースに反映されるという話を聞き、そこまで徹底しているのかと驚きました。(吉原さん)
- ▶ グリーン購入ネットワークなどのつながりを生かした情報発信をさらに進め、他の企業にも影響を与えられるよう、情報発信力の強化に努めてもらいたい。(石森さん)
- ▶ 自然に囲まれていると、かえってその素晴らしさに気付かないもの。社員や地域住民の方々が自然に触れ合う機会を意識的につくり、自然の素晴らしさを改めて実感してもらうことが、環境保全の意識向上につながるのではないのでしょうか。(村瀬さん)



「地域に開かれた企業」を目指して

メガソーラーの完成を受け、2014年度からは地域の小学生や中学生を招いた勉強会を開始しています。また、将来的には自然観察会なども開催する予定です。「地域に開かれた企業」を目指し、発信力の強化や交流促進に一層努め、さまざまなご意見を事業活動に生かしていきたいと思っております。さらに、滋賀事業所から世界に向け、ダイフクグルー

プ全体で環境配慮活動を推進するとともに、信頼されるモノづくりに励み、持続可能な社会の実現に取り組んでまいります。

取締役 常務執行役員 技術・開発本部長
滋賀事業所長
平本 孝



2013年度は、環境ビジョン2020の前半である中期環境アクションプラン(2013-2016)における初年度で、ほとんどの項目で目標達成となりました。

2013年度環境行動プラン・実績

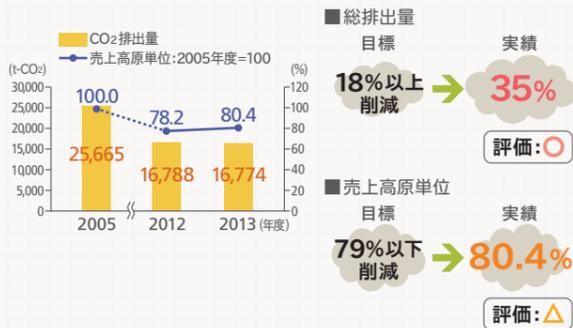
評価基準 ○:達成 △:外部要因による未達成 ×:未達成

◆事業運営における環境配慮の推進

地球温暖化防止

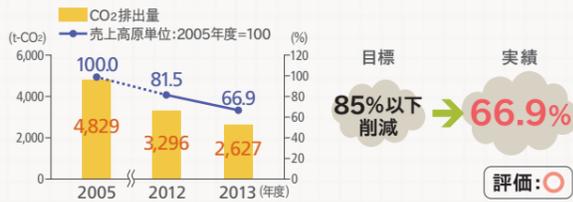
【事業活動からのCO2排出量】

対象範囲: 国内(生産・オフィス) / 管理指標: 2005年度比CO2排出量原単位



【輸送にかかわるCO2排出量】

対象範囲: 国内(製品物流) / 管理指標: 2005年度比CO2排出量原単位



生物多様性保全

対象範囲: 国内(生産・オフィス)

目標: 滋賀事業所内の生物多様性調査と保全計画策定、従業員教育による意識啓発

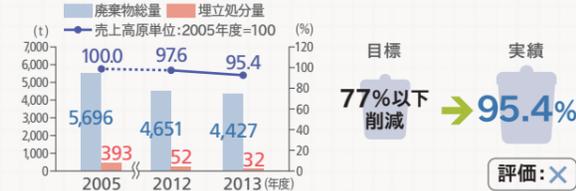
実績: 滋賀事業所内の生物多様性調査と保全計画策定、各種イベント、社内イントラネットによる意識啓発

評価: ○

省資源

【廃棄物排出量】

対象範囲: 国内(生産・オフィス) / 管理指標: 2005年度比廃棄物排出量原単位



【廃棄物リサイクル率】

対象範囲: 国内(生産・オフィス) / 管理指標: 廃棄物のリサイクル率



【水使用量】

対象範囲: 国内(生産・オフィス) / 管理指標: 2005年度比水使用量原単位



グリーン調達

対象範囲: 国内(生産・オフィス)

目標: サプライヤーの自己評価基準に追加

実績: サプライヤーの自己評価基準に追加

評価: ○

◆環境配慮製品・サービス拡充

ダイフクエコプロダクツ認定

対象範囲: グローバル

目標: 計14機種以上の認定

実績: 15機種の認定

評価: ○

CO2削減貢献量

対象範囲: グローバル

目標: 22,593 t-CO2/年以上

実績: 16,762 t-CO2/年

評価: ×

◆環境経営基盤の強化

環境教育

対象範囲: グローバル

目標: エコアクションへの参加延べ1,000名以上

実績: エコアクションへの参加延べ1,697名

評価: ○

環境経営体制

対象範囲: グローバル

目標: 環境負荷低減の可能性調査、海外拠点における現状把握と目標設定

実績: 海外拠点における現状把握と目標設定完了

評価: ○

環境教育の一環で取り組んでいるDAIFUKUエコアクションは、社員の自主的な環境学習・活動を支援するもので、目標の1.5倍の人数の参加があり、普及に向けた足がかりとなりました。

未達成となった「廃棄物排出量」は、短期期的大型プロジェクトが多く、生産効率が落ち込みました。また客先からのCO2排出

削減を目指す「削減貢献量」については、対象製品の売上げ低下により設定数値に届きませんでした。一方で、生産現場では生産改革活動が収益と環境負荷低減の両立に寄与する部門もあり、開発現場でも新たに8製品がダイフクエコプロダクツに認定されるなど、来年も目標達成できる素地ができました。

※ 詳細データはウェブサイトでご覧いただけます。 www.daifuku.co.jp/csr/environment/index.html

トピックス

環境関連の製品・サービスを展示 びわ湖環境ビジネスメッセ2013



2013年10月24日から3日間、滋賀県立長浜ドームで開催された「びわ湖環境ビジネスメッセ2013」に出展。太陽光発電システムなど環境関連の製品・サービスを展示するとともに、滋賀事業所のメガソーラーや生物多様性保全の取り組みなどを紹介しました。

エコへの取り組みが高く評価 エコオフィス大賞を受賞



2014年3月11日、関西広域連合主催の「平成25年度関西エコオフィス大賞」で滋賀事業所が「エコオフィス大賞」を受賞。社員参加型の「DAIFUKU エコアクション」、生ゴミの堆肥化、廃食油の燃料化など独自の取り組みが評価されたものです。

社員がより身近に環境貢献を実感 DAIFUKU エコアクション



社員の環境活動に対してエコポイントを付与する「DAIFUKUエコアクション」制度を2012年度からスタート。各地区でエコアクションメニュー(写真左:外来魚釣り、同右:ヨシ刈り)を用意し、2013年度は延べ1,697名がボランティア活動や環境学習に参加しました。また、社員が獲得したポイント総数と同額の金額を地域の環境保全などに役立ていただくため、滋賀県立琵琶湖博物館に寄付金を贈呈しました。

さらに、新たな取り組みとして社内のCO2排出削減寄与を目的とした「カーボンオフセット」を導入。日に新たな館の開館および送迎バス運行に伴うCO2排出量をオフセットし、「CO2ゼロ展示場・バス」として運用していきます。

新たに8製品を認定 ダイフクエコプロダクツ



2013年度は、当社独自の基準による製品の環境性能評価・認定制度「ダイフクエコプロダクツ認定制度」で、新たに8製品を認定。これにより、認定製品は合わせて15製品となりました。

【新しい認定製品】

- ケース自動倉庫「シャトルラック」(写真左)
- 搬送システム「モーターローコンベヤ」
- クリーンルーム用搬送・保管システム「MMHS」
- クリーンルーム用搬送システム「クリーンスペースキャリア」(写真右)
- 電力アシストシステム「ECO POWER ASSIST」
- ドライブスルー洗車機「ツインフェクトフォース」
- 「ツインスルーアルテノ」
- 門型洗車機「ユーロス」

ダイフクのCSR

ダイフクグループは、ステークホルダーとの共生関係を築き、企業活動を通じてグループの理念体系を実践していくことが、CSRの原点であると考えています。



ダイフクグループではCSR活動に取り組む上で、中長期的な指針である『ダイフクのCSR』と、その具体的施策『CSRアクションプラン』を策定し、ビジョンを明確にした上でCSR活動をより

一層推進していくとともに、国際的なガイドライン「GRI (Global Reporting Initiative) G4」に則った非財務情報の開示などの社会的要請に対応していく考えです。

『ダイフクのCSR』

- 当社のCSRに対する考えを簡潔にまとめたもので、包括的かつ長期的な指針
- 『6つの取り組みテーマ』を特定し、ステークホルダーとの共生と企業活動を通じて理念体系の実践を宣言

『CSRアクションプラン』

- 『6つの取り組みテーマ』に沿っての目標の設定と具体的な取り組み内容を明示した中期計画
- 年度毎の取り組み内容及び目標の達成状況をCSRレポートおよびWebサイトで開示

※ 将来のグローバル展開を視野に入れながら、当面は国内を対象とする

CSRアクションプラン

取り組みテーマ	2014～2016年度の目標	取り組み内容
① 高品質な製品・サービスの提供	製品品質・サービスの向上	<ul style="list-style-type: none"> ● 世界各地のお客さまのニーズを満たす製品品質の維持向上 ● 製品不具合の削減 ● サポート体制充実によるお客さま満足の向上
② リスクマネジメントの強化	リスク管理体制の強化	<ul style="list-style-type: none"> ● 情報セキュリティ対策の推進・強化 ● BCM (事業継続マネジメントシステム) の継続的な拡充
	コーポレートガバナンスの充実	<ul style="list-style-type: none"> ● 経営の透明性と監視の強化
③ 取引先との信頼関係の醸成	サプライチェーンでのCSR調達の推進	<ul style="list-style-type: none"> ● 取引先とのパートナーシップの構築とCSRに関する情報共有 ● 公正な調達に関する方針の徹底と仕組み構築
④ 人間尊重 (人権・労働慣行・安全・健康)	人権尊重	<ul style="list-style-type: none"> ● グループ全体での人権配慮の現状把握 ● 人権に対する社内方針のグループ全体への周知
	働きやすい職場環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ● 従業員意識調査の実施 ● ワークライフバランスの推進
	ダイバーシティの推進	<ul style="list-style-type: none"> ● 障がい者雇用の拡大 ● 高齢者雇用 ● 女性が活躍する環境の整備 ● グローバル人事の推進
	従業員・パートナー会社社員の健康管理・安全確保	<ul style="list-style-type: none"> ● 安全衛生教育の拡充 ● 生産活動における労働災害・重大災害の低減 (根絶) ● グローバル安全衛生管理体制の構築 ● 心と体の健康づくりの推進
⑤ 地域・社会との良好な関係づくり	地域・社会とのコミュニケーションと社会貢献活動の促進	<ul style="list-style-type: none"> ● グループの社会貢献への方針策定 ● 近隣地区との定期的なダイアログの実施
	人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ● グローバルビジネスリーダーの育成 ● 従業員の能力開発を支援する教育制度の構築・維持
⑥ 企業活動を通じた環境貢献	事業運営における環境配慮の推進	<ul style="list-style-type: none"> ● 省エネ・省資源による環境負荷の低減 ● 生物多様性保全活動の実施 ● サプライチェーンでのグリーン調達の推進
	環境配慮製品・サービス拡充	<ul style="list-style-type: none"> ● ダイフクエコプロダクツの認定製品の拡大 ● 製品・サービスによるCO₂削減貢献
	環境経営基盤の強化	<ul style="list-style-type: none"> ● 環境教育による従業員の環境マインド醸成 ● 国や地域を越えたグローバルな環境経営体制の構築

国連グローバル・コンパクトに署名



2014年4月、当社は「人権」「労働」「環境」「腐敗防止」に関する10原則 (囲み参照) からなる「国連グローバル・コンパクト」(UNGC) に署名しました。

署名は、ESG (環境、社会、企業統治) に関するグローバルな情報開示が要求されるようになったことを背景に、CSR活動の一環としてUNGCの趣旨に賛同し、意思表示するものです。

UNGCは、企業が社会の良き一員として行動し、持続可能な成長を実現するための世界的な枠組みづくりに参加する自発的な取り組みです。世界で1万2,000以上の企業・団体が署名・参画しています。



グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワークの有馬代表理事に、賛同する意思を表明したレターを手渡す当社社長 (写真左)

グローバル・コンパクトの10原則

- 人 権：人権擁護の支持と尊重／人権侵害への非加担
- 労働：組合結成と団体交渉権の実効化／強制労働の排除
- 環境：環境問題の予防的アプローチ／環境に対する責任のイニシアティブ
- 環境：環境にやさしい技術の開発と普及
- 腐敗防止：強要・賄賂等の腐敗防止の取組み

コーポレート・ガバナンス

コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方

当社は「最適・最良のソリューションを提供し、世界に広がるお客さまと社会の発展に貢献する」「自由闊達な明るい企業風土のもと、健全で成長性豊かなグローバル経営に徹する」という経営理念に基づき、企業の社会的責任を果たしていきます。コーポレート・ガバナンスはこの使命遂行を支える基盤であり、その体制整備をたゆまず進めていきます。当社は現在、社外取締役2名を含む取締役会、および社外監査役3名を含む5名の監査役体制を整備して企業統治体制の充実を図っています。

なお、コーポレート・ガバナンスに関する報告書は、ウェブサイトに掲載しています。

www.daifuku.co.jp/ir/governance.html

コーポレート・ガバナンス体制

「定例取締役会」は毎月開催し、必要に応じて「臨時取締役会」を開催しています。執行役員制度導入に伴い、「定例役員会」を設け、取締役全員、執行役員全員、常勤監査役が出席して合議することとしました。また、代表取締役全員で構成し、経営の重要テーマに対して協議し、取締役会に対して提言を行う機関として「経営会議」を設け、監査役出席のもとに必要な関係取締役および外部専門家にも意見を求め、適宜、社長が招集しています。さらに、棚卸資産の監査などを行う監査役による「監査役会」を開催しています。

[2013年度開催実績]

定例取締役会および役員会12回、臨時取締役会6回、経営会議6回、監査役会6回

コンプライアンス体制

全取締役を構成メンバーとする「コンプライアンス委員会」を設置し、社長を委員長として企業活動における法令順守、公正性、倫理性を確保するための活動を行っています。また、当社グループのコンプライアンスに関する質問や相談に対応するため、社内に相談窓口（法務部）を設置するとともに、社外弁護士直通の社外相談窓口も設置しています。海外現地法人の社員も連絡できる仕組みを導入しています。

2013年5月には当社のブランドに対する思いをはじめ、社是や経営理念、企業行動規範を盛り込んだブランドブック「our brand」を全社員に配布。日本語のほか英語、中国語（簡

体字・繁体字）、韓国語、タイ語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の9言語で作成し、グループ全体でブランド・CSR意識の向上を図っています。



リスクマネジメント体制

当社グループの経営に大きな影響を与えると判断されるリスクを幅広く捉え、適切な体制、対応を整備していくため、CRO (Chief Risk Officer) を任命し、その傘下にあるBCP (Business Continuity Plan) 推進本部、CSR本部において、対策を立案・推進しています。これまでの活動としては、重要度が高いリスクと評価している地震・風水害・落雷・火災・新型インフルエンザについて、各種対策を実施してきました。

2013年度は、災害対策機材・帰宅困難者用備品を国内主要拠点に配備。また、タイ、中国の現地法人においてリスク調査を実施し、リスクの把握と情報の共有化を図りました。今後もグループ全体でBCM (Business Continuity Management) の確立に努めていきます。

環境経営の推進

当社は国際社会の一員として次世代への環境責任を果たすため、当社グループが目指す将来像を示した「ダイフク環境ビジョン2020」を策定し、目標達成に向けて取り組んでいます。あらゆる事業活動において環境に配慮するとともに、環境負荷の少ないマテハンシステムの継続的開発・提供を通じて、お客さま、社会、そして地球環境の保全に貢献してまいります。また、ビジョンを遂行するため「環境経営推進委員会」を設置し、さまざまなテーマで議論を行い施策の決定、推進を図っています。

今後、グローバルな環境経営の構築に向けて、グループ全体での活動をさらに活発化させていきます。

第三者意見

CSRレポートの客観性



株式会社日本政策投資銀行
環境・CSR部長
竹ヶ原 啓介 様

1966年静岡県生まれ。1989年一橋大学法学部卒業、日本開発銀行（現日本政策投資銀行）入行。1995年フランクフルト駐在員。調査部、政策企画部などを経て2009年事業開発部CSR支援室長、2011年5月から現職

CSRレポート2014では、中期経営計画の策定を機に昨年度版から打ち出された新たな方向性が一段と鮮明になりました。トップメッセージを対談形式に変更し、社外の視点を織り交ぜながら、「ダイフクにとってのCSR」像を提示し、続く特集ページの多様な取り組みにより具体化してみせる展開は、ブランドメッセージ「Always an Edge Ahead」の一語「EDGE」との組み合わせ方も含め、非常に巧みであり、貴社にとって重要なCSR活動が何かを読み手に的確に伝えてくれます。

今回、まず目につくのが構成面での工夫です。トップメッセージで理念を打ち出し、これを具象化する特集を大幅に充実させた後、一連の活動を支えるCSRマネジメントの体系で締める3段構成とすることにより、報告内容の一貫性が強化され、レイアウトの工夫とも相まって大変読みやすくなりました。昨年度は独立項目だった人材と環境という貴社CSRを支える2大要素を特集に取り込み、EDGE

の構成要素として一体化させたことも、報告内容の体系化と独自性の強化に大きく寄与しています。

個別テーマでは、やはりテーマ毎に多様なCSR活動を紹介する特集の充実した内容が印象的です。SSCのサポートや減振ラックなどの技術による顧客の事業継続への貢献、デジタルピッキングシステムによる少子高齢化を見据えた社会的便益の提供は、今までとは異なる角度から貴社の強みに光を当てており、また、グローバル事業活動の報告は、こうした貴社の取り組みが世界中で実践されていることを改めて教えてくれます。加えて、視覚的にも印象的な「日に新た館」や滋賀事業所も貴社らしさを際立たせています。いずれも「社業を通じた社会貢献」と「人と人とのつながりを大切に」する貴社CSRの根幹を体現する好例といえます。

さらに、「ダイフクのCSR」の理念体系と、そこから導き出されたアクションプランに基づき、新たに中長期目標が設定されたことも、着実に進む進化の過程で、次のステップに向けた重要な足がかりの提示と受け取りました。

今後は、この延長上で、例えば、「6つの取り組みテーマ」を選定したプロセスや、これを目標管理していく際のKPI設定について、「ステークホルダーとの共生関係」に関連付けながら開示していくことなどが期待されます。また、今回掲載スペースが減少してしまった製品を通じた環境貢献についても、貴社の強みとして焦点を当てていただきたいところです。多様なステークホルダーが手に取る優れた対話ツールとして一層の進化に期待したいと思います。

▶ ご意見を受けて



取締役 専務執行役員
本社部門長
本田 修一

竹ヶ原様、社外第三者のお立場から、貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。

ダイフクは、マテハンシステムを通じて、これまで培った技術とノウハウをベースに幅広いソリューションを提供し、産業界の発展に貢献することを目指してきました。この6月にはステークホルダーとの共生関係の構築のため、中長期的な指針である「ダイフクのCSR」と具体的な施策「CSRアクションプラン」を策定し、当社のCSR活動をより一層推進させていく考えです。

今回のCSRレポートでは、対談や滋賀事業所ツアーな

ど外部識者による視点を多く取り入れ、より客観性を高めるとともに、分かりやすく、伝わりやすい構成を心掛けました。竹ヶ原様に構成面の工夫を感じとっていただき嬉しく思います。個別テーマにおきましては、当社のCSR活動の多様な内容に評価をいただきました。

今後は、新たに策定した指針と施策を実践し、状況・結果を開示していきます。一方、ご指摘いただいた「環境貢献」につきましてもウェブサイトなどで社内外への情報発信を充実させ、ステークホルダーの皆さまとのコミュニケーションを深めてまいります。